これからの猪猟

〈5回〉

田宮　治

限界への挑戦

この大山は何十年も猪を狩り続けてきた慣れ親しんだ猟場であるが、今まで一度も猪が上に向かって逃げたことはなかった。ましてやマロ号の一流芸を何度も振り切り、上に上にと向かって、こんな遠くの高い山まで逃げるとは驚くばかりである。

私は道路に駆け上がって夢中で五〇〇㍍くらい突っ走ったが、マロ号の姿は見えない。止めてある車にも入っておらず、路上に残っているのは二本の凍りついた轍だけで、人跡なども全くない。

雪はますます多くなり、ヘトヘトになったので路肩にどっかりと腰を下ろした。この先の大峰は険しくて雪がなくても危険な所で、単独猟では狩り入ったことがなかった。

「さて、どうしたものか」と次の一手を考えながらGPSを見ると、マロ号は既に大山の三〇〇㍍くらい上にいて、主峰、帯那山（一八〇〇㍍）の山頂を目指してどんどん上っている。時計を見ると十二時半である。もうこれ以上は私にとってすべての点で限界であり、この大山を突き進む体力は残っていない。

咄嗟の判断が迫られる中で、子供の頃から困った時にいつも狩猟の何たるかを教えてくれた満兄のことを思い出した。満兄だったらこんな時に何と言うだろうか。今でも迷ったりした時に相談しているが、必ず猟術を諭すことよりも、私の体を気遣って「治や、無理はしないでな」の一言である。いつまで経っても兄と弟であり、困ると必ず頼りにしている。

猪はこの大山を登り、逃げ続けている。俺の負けじ魂もここまでかと、持ち前の負けん気も折れそうである。

しかし、マロ号が頑張っている限り、主人の俺が諦めるわけにはいかない。「マロ号が何とかしてくれる」と、いつもの困った時の神頼みならぬマロ号頼みと決め込み、じっと固唾をのんで見守っていた。

さすがマロ号だ。凄い勢いで猪の行く先を見事に断ち切り、どんどん追い落として来るではないか。こんな限界の大山で切羽詰まった時だけに俄には信じられず、GPSを握りしめて「よし来い！マロ号、頑張ってくれ」と祈る気持ちでマロ号を信じて待っていた。

祈りがマロ号に通じたようで、どんどん猪を追い落として私の待っている道路の上の大峰筋に近づいて来ている。そして、マロ号はいつもの猪の谷落としとなって、凄い威嚇鳴きで猪を一喝しながら真上の大峰を通過して行った。

「よーし、来いマロ、その調子だ！」と、立ち上がって銃に袋を被せて道路上のマロ号を追って走り出した。道路とはいっても、走れる所は雪を踏みつけた車の轍だけである。それも凍っているのでスパイク靴でも滑って危険である。

つづら坂で上っている道路を二〇〇㍍くらい下りて、冬期間は閉め切られている車止めのゲート前の広場まで来た。

そこでGPSが示しているマロ号の位置は、広場から二つに分かれた右上に上っている所である。その上は牧場だと聞いていたが、私はこの道路下の大谷、つまり今

日、マロ号と猪を止めながら狩った大谷以外にこの道路の裏側に当たる牧場の山には狩り入ったことはなかった。

マロ号が追っているのではそれに付いて行くしかないが、問題はこの先の甲府側の山がどうなっているかである。果たして可猟区域なのだろうか。それが心配で松土さんに連絡してみた。松土さんは甲府方面の山にタツを張り替えて鹿を必至で追っている最中だった。

雪山での猪猟は1頭でゆっくり休みながら猪を攻めるのが何よりも重要なことである。

私は現在地と、逃げている猪の状況を手短に知らせ、「この先の甲府側の山は保護区ではないですよね」と尋ねた。松土さんはびっくりした様子で、「車止めのゲート前を左に曲がって上る牧場の山だろう」と聞いてきたので、「猪はこの道路の裏側を甲府方面に飛び下りている」と告げた。

「そんな所まで追って来たのか、大変だったね。牧場の大山も道路を下り続けた甲府峠までは大丈夫だよ。ただし、甲府峠を越えた甲府側の山は保護区だから注意してください」との返事である。

私はひと安心して、「ありがとう。そのことさえ分かれば十分です。助かりました。必ず追い詰めて撃ち獲るから大丈夫です」と元気に答えた。

よし、まだ時間はたっぷりあるから焦ることはないと、勇気百倍で、初めて上る牧場方面の道に進路を変えて走り出した。その道は日向なので急に雪が少なくなり、至る所に猪跡がある。この山は意外と良い猟場かもしれない。

もしかすると、このオス猪はこの山に棲みついて活動していて、今回たまたまメス猪を追っかけて小屋の沢まで出向いてたむろしていたところをマロ号に絡まれ、逃げて棲み処に帰ったのではないか。そうでなければマロ号の一流止め芸に対して、これほど遠くの山に逃げ込むはずがない。

そんなことを考えながら、初めての山道を上っていると、上の山からマロ号が飛び下りて道路を横断したようで、その真下の黒木（杉と檜の林）の中に追い落とした猪の足跡がくっきり残っていた。近づいてよく見ると、マロ号は猪の後ろにぴったり付いて押し落としていた。その足跡は雪に深くめり込み、一本の猪道になっていた。

この何頭もの足跡は、朝方にこの山で仔連れの猪が歩いて下りた猪道に乗って、マロ号に追われた猪が逃げたものだ。

よし、いよいよマロ号は限界から脱出して本領を発揮し始めた。こうなったら、どんな猪でも上には絶対に上れない。ここから先は確実にマロ号の止め現場に上から攻めて、寄り付いて決めるいつもの戦術を貫徹するだけである。

奇跡の大逆転

マロ号のお陰で限界への挑戦も無事に乗り越えられ、奇跡の大逆襲の果てに今ここに最高のクライマックスを迎えようとしている。嬉しくて小躍りしたい気持ちをこの激戦のラストスパートの闘志に

変え、道端のガードレールから身を乗り出して崖下の山容を確認しながら、マロ号に寄り付く一番良い道筋を探していた。

GPSで確認したマロ号の位置は、遥か下に広がる山裾の集落の少し上辺りのようだ。距離は三五〇㍍で、「?」マークになっている上に、無線から鳴き声も入って来ない。途中にある小峰を越えた裏側の谷底辺りで止め切って動かなくなっているようだが、マロ号までの距離は少なくみても二㌔くらいはあるだろう。

一刻を争う千載一遇のチャンスであるが、飛び下りる眼下の山容はあまりにも険しい崖である。すぐ下は高さ二〇〇㍍くらいの急斜面の崖で、そこから小谷が始まり遥か下の集落まで大谷となって下っている。

その両側一面が黒木で覆われている。その大谷を右と左に大きな峰がどっかり並び下まで続いている。とても飛び下りて追える所ではないが、ここから五〇〇㍍くらい下に一本の道が同じように大谷を横切って甲府方向まで通っている。

至難を乗り越えて急がば回れ

私は「急がば回れ」と意気込んで、元の道の車止めのあるゲートまで戻り、そこから甲府峠に向かって急いで歩き出した。甲府峠までは約二㌔のつづら坂があり、その途中一㌔くらいの所で右折して五〇〇㍍くらい進めば大谷を横切るはずである。

その道に入るのは初めてだったので、決戦の場が確実に近づいてはいるが、いつもの朝三十分くらいで決まるマロ号たちの止め現場とは状況が全く違っていた。雪道を黙々と三十分ほど歩きながら作戦を考えた。この先に待ち構えている勝負のために体力を温存することも、この年齢になると大事なことである。

やっと上から見下ろせる大谷を横切る所まで来た。GPSにマロ号のマークがはっきり出て、無線に微かなマロ号の止め鳴き声も入って来た。「やったぞ！　マロ、すぐ行くからな」と、止め現場の真上に立つために道なりにどんどん進み、GPSの犬の方向（矢印）がちょうど真下を指している所にたどり着いた。

「よし、ここからだな」と辺りを見渡すと、そこは右の大峰が上から下りている所で、道は大峰を切り開いて大きく右に回り込んでいるようだ。この辺りに雪はないが、ちょうどその場所だけ吹き溜まりになって、マロ号が追い落とした猪跡と並んで、朝方に通った猪の団体様の足跡が深い雪の上に大峰伝いに下りている。

「猪の多い山だなあ……。鹿跡ばかりで、めっきり少なくなった山梨の猪猟場でこんなに猪が多いのは保護区の隣山だからだ」と感心しながら、膝上までの雪を踏み分けて止め現場の大杉林に突入した。

見事に成長した樹齢八十年以上の大杉林の中は急斜面がどこまでも続く大山で、拳（こぶし）大くらいの石ころがゴロゴロと転がっている硬い山肌である。猪道以外はスパイク靴でも通れない。

マロ号が直前に通った猪道に乗って五〇〇㍍くらい走り、大峰を右に回るように越えた途端、マロ号の素晴らしい止め鳴きが無線に飛び込んで来た。「やっている、やっている。マロ号はやっぱり凄いや」と感激しながら、途切れていた無線にも入って来た。これでほっとひと安心して立ち止まり、GPSで念入りに止め現場と寄り付く道を選定すると、もう一つ出峰を越えた裏側の谷辺りのようだ。

執念のラストスパート

昼でも薄暗い大杉林の中は、小峰と小谷が何本も下りている想定外の難所続きである。そんな起伏のある急斜面を「何くそ！　これしきのことで負けてたまるか！」と気合を入れ、猪道に乗ってマロ号を追って行くと、目の前にお茶碗を伏せたような出峰に突き当たった。

この出峰の裏側が猪の止め現場だと分かって選んだ道ではあったが、ここまで追い続けてからの急

斜面はやはり厳しすぎる。ここからもう少し先の、あとひと踏ん張りが本当の限界に挑戦することであって、勝負の決め手になるのだ。

この一歩の難関を乗り越えてこそ、真の意義の見せ場も開けてくる。つまり、マロ号とでなければ達成できない一銃一犬の究極の単独猪犬猟が完成するのである。

「ぐずぐずせんと早く上らんかい！」と自身に檄を飛ばし、やっとのことで急坂を上り、出峰の尾根筋にたどり着いた。

その瞬間、そこは興奮の坩堝（るつぼ）となった。大杉林の薄暗い谷底からマロ号の素晴らしい止め鳴きの連続音がわき上がり、静かな山々に谺（こだま）して、最高の戦闘ムードへ突入したのである。

マロ号が体を張って作ってくれた絶好のチャンスを失敗してなるものかと、焦る気持ちを抑えながら、「よしよし、この様子なら大丈夫だ。こうなったらマロは絶対に逃しはしない」と、完勝のために小休止と腰を下ろして、これから始まる待ったなしの大一番に備えて万全の準備を整えた。

まず、この戦いでの注意点はライフル銃の確認である。特にスコープのツァイス×21倍は私の最も気に入ったこだわりの一品である。解像度は素晴らしく、薄暗い大杉林の谷底の一〇〇㍍くらい先の黒い猪でもはっきりと見える。暗い大杉林の谷底や夕暮れの藪中では、なくてはならない利器なのである。そのツァイスを二・五倍にしっかりと調整して両足の上に置き、流れる汗をタオルで拭った。

猛猪へ撃ち込んで完勝するには、猪特有の今日の逃げっぷりを参考にして、絶対に逃げられないような対策を立てた上で、攻めなければならない。そして、ここから先の戦いは待ったなしの、失敗が許されない真剣勝負である。

「よし行くぞ」と全身全霊を打ち込み、猪が逃げられない真上からの寄り付きに専念した。

大杉林を真下に下りるには急斜面で硬い山肌なので、滑り落ちないように左右の杉の木を伝いながら慎重に下りるが、下の止め現場はなかなか見えてこない。GPSでは二〇〇㍍くらいなのだが、マロ号の鳴き声は遥か下の谷底から聞えて来る。

薄暗い大杉林がずっと下まで続いているが、この急斜面のV字谷での直線距離は二〇〇㍍。まだまだ下り続けなければならない。足がガクガクになるまで下り続けたその先に、やっとマロ号の生声がわき上がっているV字谷が見えてきた。

そこには杉の木はなく、岩の崖下が五、六〇㍍もあるので、とても下りられるような場所ではない。さらに右下には大谷が続いており、あまりにも深く切り立ったV字谷なので谷底は見えない。

マロ号一頭で止めているのだから、何とか猪さえ見えれば撃ち込めるのだが……と、少しずつ杉林の中を右に回り込んでみた。そして五〇㍍くらい右の所に小峰が大谷に落ちていて、そこからだと谷底に下りられそうである。

慎重にいつでも撃てる態勢で寄り付くが、なかなか止め現場は見えてこない。もうマロ号は私の接近に気付いており、鳴き声も様子をうかがうような鳴き方になっている。いつ撃ちかけるか待っているようだ。

「よしよし、待っていろ。もう少しだ」と銃を突き出して二〇㍍くらい下りた時、マロ号が大谷の下に飛び下りて行く。「ああ、やっぱり猪も気付いていたか。それにしても凄すぎる」と、しばらくマロ号の鳴き声が途切れたので、その間に小峰を飛び下りて何とか谷底に立った。

ところが、谷底は大岩がゴロゴロしており、とても追いかけて下りられる谷ではなかった。

下り立った所は堰堤で、その上は流れ出た土砂で平らになっている。そこでマロ号は大岩を挟んで猪と対決していたようだ。辺り一面の草木がへし折られて荒らされていた。

「あと少し攻めて、上のあの端まで出れば撃てたものをなあ」と、あと一歩の頑張りが惜しまれるが、もうそんなことを考えている暇はない。急ぎ猪跡を追った。

（つづく）